居場所論：文人墨客篇（その一）

～歌人･俳人･詩人･作家らの居場所･「居場所的な存在」･「居場所のようなもの」～

天　沼　　香

はじめに（正）

本稿は、拙稿①「居場所論：子ども篇（その一）～前近代における『子ども』という存在の歴史的位相～」(『東海学院大学紀要』第３号、2009)、②「居場所論：子ども篇（その二）～聞き書きをもとにして～」(『東海学院大学紀要』第５号、2011）および③「居場所論：「その諸相」篇～居場所をなくすということなど～」(『東海学院大学紀要』第６号、2012）の姉妹編的な意味合いを有するものである。

順序からいうなら､①の次に「居場所論:子ども篇（その二）～近代における『子ども』という存在の歴史的位相～」、続いて「居場所論：子ども篇（その三）～現代における『子ども』という存在の歴史的位相～」という二篇が配置され、その次に②が置かれた後に、本稿が配され、引き続いて③、その他の「居場所論：○○篇」が来るというのが本来の姿である。

しかし、目下のところ、拙稿③の「はじめに」でも触れたように、各篇の進捗状況が凸凹なので、キリの付いた「居場所論：○○篇」から順次、順不同で掲載していくこととしたい。

はじめに（続）

本稿も基本的には歴史人類学的視座を基盤として論述されるものであるが、これまでに発表した一連の「居場所論」と同様、私なりの歴史叙述（ヒストリー＝history ＝ his story= ヒズ　ストーリー〔＋ her story= ハー　ストーリー〕＝彼や彼女のものがたり）の手法を用いて、ストーリー性を重視しながら、ひとつの「作品」として描かれるものである。

したがって、今回の「居場所論」も、従前の同論同様、所謂、論文調の〈序論・本論・結論〉の順を墨守したスタイルの文章とはかけ離れた展開、文体となっていることをあらかじめ申し上げ、ご海容いただきたいと考える。

このことは､拙稿「梅棹忠夫論～和歌森太郎･家永三郎･横山亮一に触れながら～」(『東海学院大学紀要』第４号、2010年）でも少々言及した、今は亡き敬愛する四人の恩師の言葉＝「難解を以て良しとするような似非学者の文章だけは書かないように・・・」、「ペダンティックな文章や文体ほど醜悪なものはない・・・」、「常に中学生でも読めるような平易な文章を書くように・・・」、「論文といっても定型に拘る必要は皆無だ・・・」、「歴史学は、学問であるとともに芸術でもある。したがって、歴史学の成果としての歴史叙述は、厳密な史料批判に基づく学術論文であるとともに文芸作品でもあることが理想だ・・・」、「常に独創性を重視せよ・・・」、「新しい着想、着眼、文体を試みよ・・・」といった貴重な教えの実践の試みでもあることをも強調しておきたい。

この場を借りて、亡くなって久しいにも関わらず、今なお、学問上の恩師、そしてそれ以上に人生の恩師として私を薫陶し続けてくださっている和歌森先生、家永先生、横山先生、梅棹先生の四恩師に改めて深甚の謝意を表することをお許しいただきたい。

１．「居場所」あるいは「居場所的な存在」またあるいは「居場所のようなもの」

本稿は、古代、中世、近世から近現代における文人墨客～歌人、俳人、連歌師、詩人、作家など～の短歌、俳句、詩、小説、随筆等々の作品の中から、彼らの希求した「居場所」あるいは「居場所的な存在」、また「居場所のようなもの」を探り出すことを目的とするものである。

言うまでもないことだが、彼らは、直接には「居場所」というような生硬な語彙はほとんど用いていない。

けれども、《居場所＝精神的に大変に居心地の良い場所、幸せ感に浸れる場所》というような観点をもって、彼らの作品の行間を詠み込んでいくと、そこここに自ずから、彼らの居場所、あるいは「居場所的な存在」、またあるいは「居場所のようなもの」に関する認識を垣間見ることができるのだ。

それらを具体的に抽出し、分析的に把握することを通して、私の「居場所論」の幅を広げ、さらには彩りを豊かにしたいと考えている。

結論めいたことを言うなら、高名な文人墨客たりと言えども、やはり人の子、この世の人となる以前の自らを育み、この世へと送り出してくれた母親の胎内は、彼らにとってもやはり至高の居場所だったし、生まれ出でて以後の彼らにとって、その母親はかけがえのない最上の「居場所的な存在」なのであった。

また、彼らにとって、家、家族、家庭といった存在は、大切な「居場所的な存在」、「居場所のようなもの」であることもあったし、逆に、それらは自らの生のありようにとっての重荷として受け止められていることもあった。

漂泊の俳人、歌人たちにとっては、家を離れ、家族との絆を断った流浪の旅路がそのまま自らの「居場所のようなもの」だったりすることもあるのだ。

時には、自らにとって、「居場所的な存在」など不要と言い切る作家もいる。

そんな多様な文人墨客たちの「居場所観」のもろもろの一端を抽出できたら、本稿の所期の目標は達成されたといえよう。

2．三好達治、あるいは海のなかに母そして母のなかに海

胎内は、小さいけれど、海なんだよな。宇宙なんだよ。無限抱擁の居場所なんだよ。

詩集『測量船』、『砂の砦』、『駱駝の瘤にまたがって』等で、一世を風靡した詩人、三好達治さん。彼は、ボードレールやゾラに精通した大のフランス贔屓だったね。

だけど、その反面、アングロサクソン系のイギリスやアメリカは、なんだか毛嫌いしてたなあ。

かつて彼は、放置されてただ死を待つばかりの馬を詩った「列外馬」等をものして柔らかに反戦を掲げていた。

にもかかわらず、太平洋戦争が始まると「梅林小歌」などの戦争協力詩も作ったね。

戦後はいち早く天皇制批判の旗を掲げているよ。

そんな彼を、時局に流されたとか、自己矛盾しているとか、転向そして再転向した、とかなんとか、批判するのは簡単だよな。

だけど、・・・

彼もまた、戦前戦中戦後を生きた日本の近代知識人として悩みながら、不本意のうちに時代の波に翻弄されてしまったんだろうなあ。

それが・・・

彼の美しい詩のなかにひそむ儚さの理由のひとつかもしれないね。

達治さんは、フランス仕込みの知性と感性をさりげなく見せつけながら、格調高く詩っているよ。

・・・私は壁に海を聴く・・・。私は本を閉ぢる。私は壁に凭れる。・・・　「海、遠い海よ！　と私は紙にしたためる。――海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がゐる。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。

（三好達治「郷愁」［『測量船』所収、『梶井基次郎・三好達治・堀辰雄　集』現代日本文学全集43、1954年、筑摩書房）］

なあんて、ちょっと気取って、仄かに知的に、高踏的に、しかも抒情的に、海と母、母と海とを重ね合わせているね。

日本語では、お前＝「海」の中に「母」が居て、フランス語では、あなた＝「母（la mere）」の中に「海（la mer）」がある・・・ってわけだね。

ウーム、さすがに三好達治さん！母～子宮～海の連続を想起させてくれるよなあ。！

この「ウーム」は、英語の「ウーム＝子宮（womb）」と、日本語の感嘆する時の「ウーム」を掛け言葉にした冗句なんだけど・・・！三好さんの「海と母」みたいに詩的でもなければ、あまり面白くもない親父ギャグの類だけどね。

三好さんみたいに、少しばかり衒学的に、かっこよく表現することは望むべくもないにしても、誰しも、みんな、海に連なる母に、そして海の記憶の胎内には限りない郷愁を覚えているんだよなあ。

寺山修司さんは、カルメン・マキさんにこんな歌を歌わせてるね。彼女のあのあまりにも前衛的な頽廃的な死と隣り合わせのような暗い、乾いた雰囲気と歌声にのせて・・・。

時には母のない子のように
だまって海をみつめていたい
ときには母のない子のように
ひとりで旅に出てみたい
・・・
時には母のない子のように
大きな声で叫んでみたい
　　だけど心はすぐかわる
　　母のない子になったなら
　　だれにも愛を話せない

（寺山修司作詞、田中未知作曲、山屋清編曲、
カルメン・マキ歌「時には母のない子のように）

奇才、寺山さんも、かけがえのない母のいない無限の寂寥をわずかに慰めてくれる漠としたおおきな存在は海・・・と感じていたんだろうなあ。

そんな寺山さんの心情をそのまますくい取るようにカルメン・マキさんは寂しい倦怠感のなかで、この「時には母のない子のように」とか「山羊にひかれて」とかを歌っていたなあ。

山羊にひかれてゆきたいの
遥かな国までゆきたいの

しあわせそれともふしあわせ
山のむこうになにがある

・・・

しあわせそれともふしあわせ
それをたずねて旅をゆく
（同上「山羊にひかれて」）

きっと、寺山修司さんも、母を思い、書を捨て、街に出、旅に出て、温かい居場所を求め続けていたんだろうなあ。

再び、三好達治さんだよ。彼は、こんなふうにも詩ってるね。

母よ――
淡くかなしきもののふるなり
紫陽花いろのもののふるなり
・・・
時はたそがれ
母よ私の乳母車を押せ
泣きぬれる夕陽にむかつて
燐燐と私の乳母車を押せ
・・・
淡くかなしきもののふる
紫陽花いろのもののふる道
母よ私は知ってゐる
この道は遠くはてしない道
（三好達治「乳母車」[『測量船』所収、同上）

心象風景としての乳母車と母・・・。

自らにとって、絶対的な「居場所的な存在」である母への信頼、甘え・・・その儚さ・・・。

三好さんは、こんなふうにも母を詩っているね。幼い日々、母の庇護のもとに在った日々の心地よさ、そして短さ・・・。

いにしへの日はなつかしや
すがの根のながき春日を
野にいでてげんげつませし
ははそはの母もその子も
そこばくの夢をゆめみし
ひとの世の暮るるにはやく
もろともにけふの日はかく
つつましく膝をならべて
あともなき夢のうつつを
うつうつとかたるにあかぬ
・・・
ははそはの母もその子も
はるののにあそぶあそびを
ふたたびはせず
（三好達治「いにしへの日は」『花筐』所収、同右）

春の日に、野に出でて、れんげそうを摘んだり、若菜を摘んだり、という原始古代から少し前までの過去における母と子、あるいは恋人たちの原風景の懐かしさ。けれども、ひがな一日、母と子がゆったり遊んだはるののという居場所に、その母と子は再びは戻って来ない・・・。

三好さんにとって、この世のはるののは、かつて自らが確かに存在していた母の胎内を思い起こさせる「居場所のようなもの」だったんだろうかなあ。

それだけにたいせつな大切なはるののにあそんだいにしへの時。

かけがへのない愉楽の時。

それを奪い去る過ぎ行く時の酷薄さ。

そんななかでもけっして変わることのない、自らの永遠にして絶対的な「居場所的な存在」としてのははそはの母への思い。

三好達治、あるいは、寺山修司・・・限りない母への郷愁。そして海、時間的、空間的な旅への憧憬・・・。

母のなかに海、そして・・・海は母。

３．安里清信の居場所、あるいは沖縄の海そして母、また有島武郎の心の居場所、あるいはクロポトキン

自らの生涯を賭けて、多彩な生命を宿す豊かな沖縄の海を守ろうとした安里清信さんは、底抜けの笑顔の持ち主で、根っからの、ウチナンチュで、海ンチュだったよね。

瞳がとびきりきれいな人だったね。

安里さんは言う。

海への畏敬の念を込めて言うんだ。

海は人の母ださあ～。
（映画「シバサシ～安里清信の残照～」）

このゆるぎないすてきな認識のもと、沖縄の海に限りない郷愁と誇りを抱いていたからこそ、彼は、金武湾の埋め立に抵抗し続けたんだよね。

煌めく金武湾、そして悲しいほどに澄み切った沖縄の海こそが、安里さんにとって、とても心が安らぐ居場所だったんだ。

この世に生まれてくる前の彼にとってのお母さんの胎内のようにね。

幼い頃の彼にとってのお母さんの胸のなかのようにね。

だから、そんな大切な自らの居場所を失うまいと、・・・そんなかけがえのない居場所をウチナンチュの人たちに残したいと、・・・その子孫たちにも残したいと、・・・ヤマトンチュたちにも、その子孫たちにも残したいと、・・・世界中の人たちとその子孫たちにも、きれいな母なる海を残したいと、安里さんは命がけだったんだ。

沖縄の海は世界一、澄んでるさあ～。
限りなく透明に近い群青色の海ださあ～、
鮮やかに明るい翠玉石色の海ださあ～、

こんな爽やかな沖縄の紺碧の海や、純ないたいけな少女を汚すなんて事は、誰にも、外国の軍隊にだって、日本の政治家たちにだって、けっして許されることじゃない。

人類の子孫のためにも、あらゆる地球上の生物とその子孫のためにも、きれいな海を、純な少女を、かけがえのない母を、みんなでしっかり守っていかないとね。

地球上の万物を育み、大きな無限抱擁で包み込んでくれる広く大きな海と、子どもを身ごもり、微細な命を慈しみ育んでくれる小さなお母さんとの間には相通じる縁があるんだなあ。

そんな、海に、そして大宇宙に繋がっている、小さくて、でも、大きなお母さんと一体の安らかな、安心しきった状態に別れを告げて、それぞれの人は、この世に生まれ出てくるんだね。

だから、人間は、みんな、本源的な寂しさ、苦しみ、悲しみ、悩みをかかえて生まれてくるって言えるよなあ。

「生まれ出づる悩み」・・・。

一旦、この最上の居場所から離れてしまうと、もう二度とそこに戻ることはできないもんなあ。人間が最初に感じる寂寥感と無常観と不条理はこれかもね。

有島武郎さんは、こんなことを書いているよ。

・・・どうかした拍子に君の事を思い出すと、私は人生の旅路の淋しさを味った。一度とにかく顔を合わせて、・・・心に触れ合った同志が、一旦別れたが最後、同じこの地球の上に呼吸しながら、未来永劫またと邂逅ない・・・それはなんという不思議な、淋しい、恐ろしい事だ。・・・孤独に親しみやすいくせに、どこか殉情的で、人なつっこい私の心は、どうかした拍子に、このやむをえない人間の運命をしみじみと感じて深いは鬱に襲われる。
（有島武郎『生まれ出づる悩み』、2009年、集英社、底本は『有島武郎全集』第３巻［筑摩書房］＝これを現代仮名遣いに改めたもの）

これは、有島さんの自伝的小説のなかの一節。

主人公のところに絵を見てもらいに来た画家を目指しながらも現実の生活のために漁師をしている男と主人公との出会いと別れを描いた箇所だけど、有島さんの人生観がかなり直截的に湧出している文章ではあるよなあ。

人生をあまりに真摯に、理想と現実、聖と俗、禁欲と肉欲の相克に悩みながら誠実に生き、信仰を捨て、恵まれた教職を棄て、文学に生きる覚悟を持ち、『白樺』そして白樺派に居場所を得て、二十八歳の母を亡くした我が子たちに「小さき者へ」を残し、『カインの末裔』、『或る女』等の珠玉の作品を世に送り出しながら、短い期間で自らの才能の枯渇を認識し、恵まれた富裕な階層の人間でありながら、社会の矛盾、不平等に真っ直ぐに目を向け、貧しい小作人たちのために自らが所有する大農場を解放し、財も名声も捨てて、愛する女ともども自らの命を絶った有島さんの四十五年の生涯は、「生まれ出づる悩み」に彩られ続けていたんだな。

小説よりもはるかに数奇な劇的な人生だったね。

「一旦別れたが最後、同じこの地球の上に呼吸しながら、未来永劫またと邂逅ない・・・。このやむをえない人間の運命・・・」なんていう表現の原点には、母の胎内から生まれ出てくるや、人間はもう二度とその極楽浄土のような居場所には戻れないという現実に端を発する恐怖感、孤独感、無常観が宿っているような気がするんだよね。

さらに、有島さんのこんな表現の背後には、彼が敬愛してやまなかったクロポトキンさんとの出逢いと別れの珠玉の体験も介在しているんじゃないかなあ。

東洋からやってきたまったく面識のない、得体の知れない青年を何らの警戒心もなくロンドン郊外の自宅に招じ入れ、胸襟を開いて語ってくれ、昼食までご馳走してくれるなど、温かいもてなしをしてくれた晩年のクロポトキンさんと夫人そして彼の愛娘。

クロポトキンその人の思想と生き方に限りない共感を覚え始めていた有島さんは夢見心地だったんだろうなあ。

その日のクロポトキン家の狭い居間や書斎は、彼にとって、ほんのひと時の語らいの場ではあったけれども、そこを去った後も生涯に渡って忘れられない心の「居場所のようなもの」になったんだよな。

> 美しき巻髪持ちたる近侍皇后の膝に眠りたるも彼に候。貴族の出なる俊才と生い立ちながら国家の経営を輔翼せんためには、みずから択んでシベリヤの兵営に身を置きしも彼に候。地質協会の有力なる学者としてフィンランドに探検を試み、ここにはじめて思想の廻転期を得たるも彼の候。舞踏会に夜を更かしてその御者の風雪の中に眠れるを見て心大いに動きたるも彼に候。意を決して貴族の光栄と資産とを扮ち去りチャイコフスキー秘密結社に加わり獄に投ぜられ、小説よりも奇なる脱獄を試み、西欧の天地に乗り出したるも彼の候。爾来全欧州の迫害の中に寸分も己れの主張を曲げず、将来における人類の福祉のために三十余年の長き月日の間、生き、働き、論じ、戦い、愛したるものは彼に候。
>
> (有島武郎「クロポトキンの印象」[『新潮』大正５年７月号所収])

ロンドン滞在中の明治四十年二月の、とある日曜日の、めくるめくような体験を契機に、有島さんは、以前にも増してクロポトキンさんの思想と人間性に尊崇と親しみの念を抱き、考えも実際の行動もいっそう、この人に志向していったんだね。

有島さんが後に書いた『宣言一つ』だって、けっしてクロポトキン思想の全否定ではないもんね。

「その後私は故国に向かって旅立ち、復た斯のなつかしい家を訪るる機会は掴まずに終わり候」(有島、同上)。万感の愛惜の念をもって、有島さんは、その後、二度と巡り逢うことのなかったクロポトキンさんと、「母」を思わせるようなクロポトキン夫人との思い出を描いているね。

クロポトキンさんのほうも、有島さんに好意や共感を抱いたからこそ、自分の方から再会を切り出したんだろうな。

双方にとって、えもいわれぬ一期一会だったんだね。

この出逢いを契機に、クロポトキンさんも遠い東洋の青年の心のなかに、しっかと自らの思想の「居場所的な存在」を得ることになったね。これは、思想家としてのクロポトキンさんにとっても、とても嬉しいことだったろうなあ。

もちろん、彼の人と思想は、幸徳秋水さんや大杉栄さんら、理想に燃えた日本の青年たちの心のなかにもきっちりとした居場所を持っていたけれど、有島さんの心のなかっていうのは、彼にとってはまた格別な居場所だったに違いないよ。

また、有島さんは、三人の幼い息子たちに、こんな言葉を残しているね。

> お前たちは去年一人の、たった一人のママを永久に失ってしまった。お前たちは生まれると間もなく、生命にいちばんだいじな養分を奪われてしまったのだ。お前たちの人生はそこですでに暗い。この間ある雑誌社が「私の母」という小さな感想を書けといって来た時、私はなんの気もなく、「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きていることだ」と書いてのけた。そして私の万年筆がそれを書き終えるか終えないに、私はすぐお前たちのことを思った。私の心は悪事でも働いたように痛かった。しかも事実は事実だ。私はその点で幸福だった。お前たちは不幸だ。恢復の途なく不幸だ。不幸なものたちよ。
>
> (有島武郎「小さき者へ」[『生まれ出づる悩み・小さき者へ　ほか五編』1972年、講談社])

有島さんは、母という存在を有する自分を幸福、母という存在を幼くして失ってしまった自らの息子たちを不幸と断じているね。

母が「生命にいちばんだいじな養分」と形容されているあたりには、母と母の胎内との〜最上の居場所として

の〜連続性が感じられるよなあ。

へその緒を切られるってことは、いよいよお母さんとの肉体的なつながりを遮断されること。
母の胎内との最終的な別離を意味しているね。

ふるさとや臍の緒に泣く年の暮
（松尾芭蕉）

それでも、まだ、幼い時期を、胎内から連続しているようなお母さんの圧倒的な庇護のもとで育つことができる子どもは幸せだよね。

だから、有島さんは、四歳、三歳、二歳で母を、かけがえのない居場所を失ってしまった三人の息子たちが不憫でならなかったんだね。その不幸を、そして父を乗り越えて生きていってほしいと切に願ったんだよな。

まあ、それにしては、その子たちから、自らがこの世を去るという悲しいかたちでもって、その子たちの父親までも奪ってしまったけどね。

4．初めての居場所探し、あるいは居場所としての母

赤ちゃんが、温かく柔らかいお母さんに抱っこされて、まろやかに豊かな乳房に吸い付きたくて、泣くのは、前にも触れた通り、赤ちゃんなりの、お母さんの胎内から追放されたことへの抵抗と次善の居場所探しの〈本能的な無意識の〉意志表示なんだね。

柔かに暖（ママ）く、縋りついて顔を埋めれば、顔中が埋まつてしまふ母の乳房を　銜へたまま、何の心配も無く眠つた月日は短かかつた。・・・
（水上瀧太郎「女人崇拝」『水上瀧太郎・久保田万太郎　集』（現代日本文学全集29、1956年、筑摩書房）

この世に生まれ出てからも、水上さんの表現する、たまゆらのこんな記憶の月日あたりまでは、個々の人は、まだ自分の人生を母の胎内との連なりをもってみることができるんだよね。でも、その月日は、あまりにも短いんだなあ。

高村光太郎さんも、母の胎内から続いているふところの中のお乳をいとおしげに謳っているね。

夜中に目をさましてかじりついた
あのむつとするふところの中のお乳。
・・・
鑿で怪我をしたおれのうしろから
切火をうつて学校へ出してくれたあの朝。
・・・
立身出世しないおれをいつまでも信じきり、
自分の一生の望もすてたあの凹（くぼ）んだ眼。
・・・
母を思ひ出すとおれは愚にかへり、
人生の底がぬけて
怖いものがなくなる。

どんな事があらうともみんな
死んだ母が知つてゐるやうな気がする。

（高村光太郎「母をおもふ」[伊藤信吉編『高村光太郎詩集』、1950年、新潮社])

智恵子さんが悲しい病を発症する前も、発症してからも、いつも彼女を愛してやまなかった光太郎さんにとっても、「あの小さなからだ」の母は、彼の一切を知り、一切を許容し、一切を包摂する絶対的な無限の「居場所的な存在」だったんだよなあ。

生涯に渡っての心の居場所だったんだよ。

光太郎さんにとって、「むつとするふところの中のお乳」の実存は、母の胎内へと連なる回廊、そして海に連なる、さらに全宇宙へと繋がる至福の居場所の記憶だったんだな。

赤ちゃんが必死になってお母さんの乳房に吸い付くのは、生存のためにお乳を求める行為であるとともに、直近の過去における自らの至高の居場所、胎内への回帰の可能性を探っている行為でもあるかもね。

赤ちゃんや幼ない子どもたちは、本能的にお母さんの胸のなかが、とても心地よい安心できる「居場所的な存在」だってことを、・・・そしてお母さんの胎内は、さらに素敵な居場所だったってことを、知ってるんだ。

だから、仕事で疲れきって帰宅して、浮かない顔で寝転んじゃってるお父さんに、さりげなくこんな素敵な言葉を贈れるんだな。

おとうさんもおかあさんにだっこしてもらいな。
悲しいのなんかどっかにいっちゃうよ。
（相田みつを＋川上健一『日めくり物語』、2004年、小学館）

真に迫った優しい言葉だね。

この子自身の体験に基づいた説得力のある、物憂げな疲れ切ってるおとうさんへの確信に満ちた提案だよね。

しかも、この子の発言には、無意識のうちにも、女権拡張論、女性解放論の視座からみると、「抱かれるおんな」から「抱くおんな」への転換の志向、ジェンダー＝社会的「性」の決めつけを否定しようという志向が明確にみられて、なかなか心強いとも言えるよね。

この子は、きっと上野千鶴子さんの一番弟子になれるぞ。

推測するに、この子のお母さんは、この子ばっかりじゃなくて、疲れた自分の連れ合いさんをも、ぎゅうっと抱きしめてあげられる懐の深い女性だったんだろうなあ。

この三歳の女の子は大きくなったら、この子のお母さんのように、子どもたちや連れ合いやその他の人たちの安らげる居場所になるだろうね。

「ごんぎつね」、「でんでんむしのかなしみ」、「手袋を買いに」、「おじいさんのランプ」等々の作品で、今も子どもたちをわくわくどきどきはらはらさせ、考えさせ、世に不条理が存在することを認識させてくれる童話作家の新美南吉さん。

彼の作品のなかには、母への憧憬が伏流しているね。

おききよ　この百姓家から
もれてくるハモニカの声を
誰かが風呂にはいりながら
ハモニカを吹いているのだ
・・・
何というやつだろうそいつは
・・・
そいつは、やんちゃで、
夕飯をを茶わんに十ぱいも食べ、
母親のことを馬鹿といい、
昨日おろしたばかりのシャツを
もう今日破いてしまうというやつなんだ
だが父親に叱られでもすると
ひどくしょげてしまって、
くらいくどばたにいる母親のところへ
ねだったかねを半分返しに来るといったやつなんだ
そいつはやんちゃで、・・・夢が多くて・・・
そんな若い者がここの家にはいるんだ
こんなみすぼらしいかやぶきの
百姓家だが、ここには明るい幸福があるのだ
おききよ、この家の背戸口に
夕闇の中ににおっている
茗荷のほのかなかおりを

新美南吉「百姓家」(『校定　新美南吉全集』第八巻、大日本図書)

安城高等女学校の先生をしていた頃、下宿していた家の近くの農家の情景を描いたこの南吉さんの作品には、若者のささやかな幸せを語って、その実、彼自身の母という存在への憧れが露呈しているよね。

幼くして生母を亡くした彼は、お母さんの面影を二十九年の短い人生の間、ずっと背負い続けていたんだろうなあ。

南吉さんがまだ四つの時、実のお母さんが亡くなったと思ったら、ほどなく、継母がやってきた。と思ったら、ほどなく腹違いの弟さんが生まれたよ。

幼い南吉さんの心境は複雑だったろうね。幼少の頃から、やわらかい感性と鋭い知性を二つながら持ち合わせていた彼だから、余計にね。

もっと、もっと、お母さんの背中におんぶされたかったんだろうなあ。もっと、思い切り甘えたかったんだろうなあ。

南吉さんにとっては、「百姓家」の若い者のように、母親の居る光景のなかに存在できることこそが理想的な幸せだったんだね。

母の居る光景への、そして「居場所的な存在」としての母への憧憬だね。

幼な子のまま、母親との永遠の別れを体験した南吉さんは、終生、母親の居る場所こそ、自らの理想の居場所と思っていたんだろうなあ。

金子みすずさんも歌っているよ。

わたしがさびしいときに、
よその人は知らないの。
わたしがさびしいときに
お友だちはわらうの。
わたしがさびしいときに、
お母さんはやさしいの。
・・・

(金子みすず「さびしいとき」[『金子みすず童謡集　明るい方へ』1995年、ＪＵＬＡ出版局]

さびしいとき、よその人は知らんぷり、友だちすら笑ってるなかで、自分を優しく見守って庇後してくれるのはお母さん、というみすずさんの心情の吐露だよね。

彼女にとっては、いついかなるときでも、たとえどんな状態であったとしてもお母さんは絶対的な「居場所的な存在」って感じだね。

街で逢った
母さんと子供
ちらと聞いたは
「明日」

街の果は
夕焼小焼、
春の近さも
知れる日。

なぜか私も
うれしくなって
思って来たは
「明日」
金子みすず「明日」(『金子みすず童謡集　わたしと小鳥とすずと』1984年、ＪＵＬＡ出版局)

みすずさんは、母と子と明日に希望を、夢を託したんだね。
母と子のいる夕焼け小焼けの光景に、安らぎと明日のある居場所を見出して、うれしくなったんだね。
みすずさんは、こんなふうにも詩っているね。

お母様は
おとなで大きいけれど
お母様の
おこころは小さい

だってお母様はいいました
小さい私でいっぱいだって

私は子供で小さいけれど
小さいこころの私は大きい

だって大きいお母様で
まだいっぱいにならないで
いろんなことを思うから
(金子みすず「こころ」)

「お母様の・・・おこころは小さい」と言いながら、こころのなかを自分だけでいっぱいにしてくれているお母様への限りない敬愛の念や信頼感が溢れ出ている詩だよね。
どんなであっても、みすずさんにとって、お母様は安心していられる絶対的な「居場所的な存在」だったんだな。
お父様に関して、こんな詩を作る人は、世界中を見渡しても、どこにもいないもんなあ。

大塚寅彦さんは、遠い夏の日の母とのめくるめく思ひ出を、日傘の翳（かげ）に託して歌っているよ。

母の日傘のたもつひめやかなる翳（かげ）にとらはれてゐしとほき夏の日
(大塚寅彦『刺青天使』)

切なく甘く、そして儚げでありながら確かな母の情愛の象徴としての日傘。母の絶対的な庇護のもと、その日傘の心地よい翳のなかで何処かへと歩いた遠い幼い暑い夏の日の仄かな記憶。
誰もが持っている、二度と帰らない幼少の頃のおぼろげで心地よげな思い出。
母の翳す日傘が創るひめやかな空間は、幼な子にとっては揺らめきながらも安心できる「居場所のようなもの」だったんだ。
幼な子にとって、お母さんの日傘の翳のなかで辿った道は、近い過去に自らが存在していた至福の居場所、母の胎内から繋がっている回廊だったのかもしれないなあ。

たらちねの母が吊りたる青蚊帳をすがしとい寝つ弛みたれども
(長塚節)

この儚げな、けれども、しっかり自分を守ってくれる蚊帳の中は、長塚さんにとっては、きっと母の胎内に繋がるいとおしい「居場所のようなもの」だったんだな。

若くして夭折した中原中也さんは、女人を、そして女人の胸を海のように感じて、謳いあげているよ。

そなたの胸は海のやう
おほらかにこそうちあぐる。
はるかなる空、あをき浪、
涼しかぜさへ吹きそひて
松の梢をわたりつつ
磯白々とつづきけり。
(中原中也「みちこ」)

彼は常々、「詩は俺の生理現象なんだ」（中原思郎「兄中原中也のおもい出」）と嘯いていたようだね。だけど、生前においては、社会的にも経済的にも恵まれていたとは言い難かったこの詩人にとって、みちこの胸は心休まる「居場所のようなもの」だったんだね。

批評家たちがしたり顔で、みちこのモデルは長谷川泰子じゃないとか、この詩は中也らしくないとか、中也の女性観とは違う女性像が描かれているとかなんとか、知ったらしい論を展開してたって、そんなものどうだっていい。かっぽっちゃっておこう。

女人を、母を、海に喩えて賛美する人たちは限りなく多いんだし、この詩人の感性がそのように謳ってもまったく違和感はないんだから。

それにしても、みちこって誰なんだろうね。ちょっとは気になるなあ。

ついこの間、海辺を走る電車のなかで、赤ちゃんから幼児になりかけの男の子と隣り合わせで座った時のこと。

けっこうしゃべれるようになってきたばかりの、小さいながら、なかなか意志的な面構えをしたこの子は、お母さんに甘えて寄りかかりながら、こんなことを言ってたよ。

牛乳飲みたいなあ〜。だってさあ、牛乳って、ママのおっぱいの匂いがするんだも〜ん。抱っこしてほしいなあ〜。だってさあ、ママのおひざって、なんだか安心できるんだも〜ん

感性豊かな子だよね。

ちょっと精悍な感じの容貌に、ひょうきんなところも持ち合わせた一角の人物のような子だったなあ。

離乳期を迎え、そろそろ、お母さんのおっぱいから離れなければならない時期にさしかかりながらも、生まれて以来の自分の安心できる「居場所のようなもの」をまだ確保しておきたいという意思表示をしているみたいだったよ。

そんなお母さんだから、親しまれながら敬愛もされてるんだ。

そんなお母さんをいとおしみ、感謝の気持ちを歌ったこんな歌があるね。

かあさんは　夜なべをして
手袋あんでくれた
木枯らし吹いちゃ　冷たかろうて
せっせとあんだだよ
・・・
（窪田聡作詞作曲「かあさんの歌」、1958年）

お母さんへの情愛と感謝の念に満ちた歌詞だね。

そのおんなじ歌のなかで、お父さんに関しては、

・・・
おとうは土間で　わら打ち仕事
お前もがんばれよ
（同上）

だもんね。

かたや「かあさん」、かたや「おとう」だぜ。呼び捨てかあ。

いくら、「かあさん」が主人公の歌とは言え、ちょっと、ちょっと、「おとう」はないよな。

何しろ、母の日には、お母さんの存在感たっぷりな、こんな句が登場するんだよなあ。

母の日や何もせずとも母のゐて　（大橋敦子）

母の日や大きな星がやや下位に　（中村草田男）

それに対して、父の日に登場する句はこんなだもんね。

父の日や手持ち無沙汰の耳掃除　（津端きしを）

同じ俳句でも「母の日」の句と「父の日」の句とでは、それぞれの日の主人公の存在感に違いがあり過ぎるよなあ。

まあ、季語としての「父の日」の本来的な意味合いが「哀れ」「悲哀」であってみれば、「母の日」の句との格調、雰囲気の違いには抗い難いものがあるのは当然なのかもしれないけどね。

この宇宙の果ての小さな星の一隅で、なんらかのきっかけでたまたま出逢う人と人。

この、ある人とある人とが出逢う可能性は、0.00000000000000006パーセント。

そんな奇跡的な出逢いを果たした人と人との間にも、いつの日か、やがては訪れる、決して避けることのできない別離、「永訣」。

幽明境を異にする、この永の別れにしても、死にゆく

人が母である場合、子どもたちは、あまりにも特別な、あまりにも許しがたい、あまりにも受け容れがたい不条理として、それを受け止める・・・。

「きょう、ママンが死んだ」。その時から、主人公ムルソーには、母の葬儀の翌日の旧知の女との情事、ぎらつく陽光の下での「太陽のせい」にするアラブ人殺人、自らの死刑判決に湧き起こる幸せな気持ち・・・等々、ごくふつうではありえない一連の不条理な心情そして行動が陸続として生起する（アルベール・カミュ『異邦人』［窪田啓作訳］、新潮社）。

ムルソーにとって、母の死は「不条理」の連鎖を呼び起こす最大の不条理だったに違いないよなあ。

斎藤茂吉さんのような熟練の精神科医でも、母の死に際してはとても平静ではいられなかったんだね。

みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる

寄り添へる吾を目守りて言ひたまふ何かいひたまふわれは子なれば

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる

我が母よ死にたまひゆく我が母よ我を生まし乳足らひし母よ

のど赤き玄鳥（つばくらめ）ふたつ屋梁（はり）にゐて足乳ねの母は死にたまふなり

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤とははそはの母は燃えゆきにけり

（斎藤茂吉「死にたまふ母」いずれも大正２年作［「赤光」所収、『斎藤茂吉全集』第１巻、岩波書店］）

・・・「死にたまふ」と、万感の思いを込めて茂吉さんは、垂乳根の「母」の死を痛恨の思いでうたい上げているね。

もちろん、実相観入の説を説く高名な歌人であるとともに著名な医師でもある茂吉さんは、静かに自らの母の死を写生し、受容しようと試みてもいるよ。

だけど、それでも哀惜の念はなお深く、最後に掲げた歌などには、静謐な情景描写のなかにも平静とは到底、言いがたい茂吉さんの心情が滲み出ているよなあ。

しかし、父の「死」に際して、こんな哀切な歌が詠まれたことは寡聞にして知らないなあ。

母に関しては、「たらちねの」とか「ははそはの」とかいった情愛あふれる、たおやかな枕詞があるけれど、父に関しては何かあったっけ。

旅には「草枕」、筑紫には「しらぬひ」、山や峰には「あしひきの」、天、空、日、光には「ひさかたの」なんて素敵な枕詞があるけどね。

まあ、そんな修辞法以前の問題として、母を歌う短歌や詩は多いけど、それに比べると父を詠み込んだ短歌や詩はずっと少ないんだな。

弟と相むかひゐてものを言ふ互（かたみ）のこゑは父母のこゑ

（斎藤茂吉「白桃」）

茂吉さんも、せいぜい、こんな感じで、さらっと父の声を母の声ともども懐かしむくらいだよな。

高村光太郎さんのあの有名な詩には、父が登場してくるね。

父の顔を粘土（どろ）にてつくれば
かはたれ時の窓の下に
父の顔の悲しくさびしや

どこか似てゐるわが顔のおもかげは
うす気味わろきまでに理法のおそろしく
わが魂の老いさき、まざまざと
・・・
つくられし父の顔は
魚類のごとくふかく黙すれど
あはれ痛ましき過ぎし日を語る
・・・

（高村光太郎「父の顔」（『道程』〔現代日本文学全集 24・高村、萩原朔太郎、宮澤賢治集』1954 年、筑摩書房）

僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る
ああ、自然よ
父よ
僕を一人立ちにさせた廣大な父よ

僕から目を離さないで守る事をせよ
常に父の気白鬼（きほく）を僕に充たせよ
この遠い道程のため
この遠い道程のため

（光太郎「道程」（同右）

光太郎さんの作品でも、高名な自らの父、高村光雲を詠ったり、抽象的な存在として「父」を詠ったこれらの詩なんかが知られてるくらいかなあ。

前者は、父への敬愛の気持ちの表出っていうよりは、自らを父に重ね合わせながら、老残の寂しさを詠んでいる詩っていう趣が濃いし、後者は実際の父より、父に擬して自然への畏敬を詠んでいる詩って趣だよね。

畢竟、どうあがいたって、所詮、父は、「おとう」は、生まれる前も、生まれてからも最上の居場所、そして「居場所的な存在」である母には、「かあさん」には到底かなわない、儚い脆い危なげな小さな存在なんだよな。

茂吉さんも、光太郎さんも、父は声や顔や姿かたちが自分に似ている存在とは受け止めてるけど・・・ね。

種の保存の決定的瞬間において、女人のなかに心地よく精子を放出するだけの存在と、自らの胎内にちん入してきた精子と自らの卵子とを娶せて、新しい生命を創造し、出産前は至高の居場所として、柔らかくも鉄壁以上の強さで胎児を守り抜き、出産後も幼な子のかけがえのない「居場所的な存在」であり続ける存在とでは、子どもにとっての存在感が全然、違うんだね。

例え、人工授精や体外受精だったとしても、受精卵は女人の胎内で慈しみ育まれるんだもんなあ。

宮澤賢治さんは、ジョバンニとの会話のなかで、カムパネルラに「ぼくはおつかさんが、ほんたうに幸ひになるなら、どんなことでもする。けれどもいつたいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸ひなんだらう」（宮澤「銀河鉄道の夜」、宮澤前掲書）と語らせているよ。

このカムパネルラの思いは、無限抱擁の「居場所的な存在」であるお母さんに対する子どもの普遍的な思いっていえるような気がするなあ。

子どもにとって、お母さんはなんらの見返りも求めずに庇護してくれる温かい居場所そのものだから、子どものほうでも自ずとそうした母を幸せにしたい、母に幸せな居場所を提供したいと切に願うんだね。

5．この世の人生、あるいは居場所・「居場所的な存在」・「居場所のようなもの」探しの「暗夜行路」

至高の居場所との別離を経て、この世の人となった人間は、誰もみんな、人生の過程における一時期一時期、その時その時の自分にとって、それなりに快適な居場所や「居場所的な存在」また「居場所のようなもの」を探しながら生きてるんだね。

はっきり意識しながら、その時、その時における自分にぴったりの居場所探しをしている人もいるよね。

ほとんど無意識のうちに、その時、その時の自分にとって心地よさそうな居場所を求めて彷徨っている人もいるね。

みんな、それぞれに、生きてるなかで、その時、その時の自分にしっくり合う居場所を探し求めているんだなあ。

小学校とか中学校とかのように、法的な義務として人生の決まった一時期に否応なく所属せざるをえない居場所もあるし、大金持ちでもない限りは、生計を立てるために、労働の対価として賃金を得るべく好むと好まざるとに関わらず属さざるをえない会社とか団体とかいった居場所もあるけどね。

でも、そんな居場所も含めて、人生の時々において、どんな居場所と遭遇したか、どんな心地よい居場所と出会えたか、自分に合った居場所を見つけることができたかってことは、そして、どんな「居場所的な存在」や「居場所のようなもの」と出会えたかってことは、個々それぞれの人生にとって、けっこう大きな意味合いを持っていることだよなあ。

居場所探しの「行路」は、人生そのものだからね。

志賀直哉さんの小説の主人公、時任謙作みたいに極めて複雑な不倫の子として生まれ出づると、その「行路」は、まさに「暗夜行路」となるのかもしれないなあ。

で、その居場所って、どんなとこかなあ。

居場所って言っても、いろいろな場所があるよね。

「居場所的な存在」とか「居場所のようなもの」とかいうことになると、具体的な場所とばかりは限らないしね。

そうだね。

赤ちゃんの居場所としてのお母さんの胸のなか、とか・・・
長じた子どもにとってのかけがえのない「居場所

的な存在」としての母、とか・・・
子どもの居場所としての、かつてのウサギ追いしかの山、子鮒釣りしかの川、とか、里山とか・・・
園児の居場所としての保育園とか幼稚園、とか・・・
小学生の居場所としての小学校、とか・・・
中学生の居場所としての中学校、とか・・・
高校生の居場所としての高校、とか・・・
大学生の居場所としての大学、とか・・・
文化部や運動部の部員たちの居場所としての部室、とか・・・
読書家の居場所としての図書館、とか・・・
若者の居場所としての繁華街、とか・・・
恋人たちの居場所としての夜の公園、とか・・・
勤め人の居場所としての会社、とか・・・
落語家さんの居場所としての高座、とか・・・
お相撲さんの居場所としての土俵、とか・・・
映画俳優たちの永遠の居場所としての銀幕、とか・・・
家族の居場所としての家、とか・・・家庭、とか・・・
高齢者の居場所としての隠居庵とか老健施設、とか・・・
病人やけが人の居場所としての病院、とか・・・
罪を犯してしまった人の居場所としての刑務所、とか・・・

本好きな人にとっての古書市、骨董品好きな人にとっての骨董市、釣り好きな人にとっての釣りの穴場、山好きの人にとっての登山道や山頂、山そのもの・・・なんていうのも、いっ時の、なんともこたえられない「居場所のようなもの」だね。

現代人、わけても若者たちにとって、スマートフォンなんていう通信機器も、彼らの「居場所のようなもの」といえるね。あの小さな機器に取り込まれちゃって、あの小さな画面にのめり込んでしまうのは、生の人間同士の交流という観点等からすると大問題だけどね。

生まれ故郷を離れて都会に働きに出てきている人たちにとっては、ふる里は遠きにありて思う忘れられない心の居場所だよね。

疎開先で、姉とともに水汲みに行った帰り際、大八車が横倒しになり、積んでいた水がいっぱいに入ったガラスの瓶が割れ、お千代ちゃんは左手に大怪我をしてしまい、その左手は不如意になってしまった。

塞ぎ込み、すっかり引っ込み思案になってしまったお千代ちゃんを、お母さんは懸命に守り、慰め励まし、お風呂とか、いろんなところで歌を歌って聞かせてくれた。

それが、塞ぎ込むお千代ちゃんの心を開くきっかけとなり、やがてお風呂の中で、彼女もお母さんと一緒に「りんごの唄」等々を謳うようになって、歌う楽しさを覚えていった・・・。

お千代ちゃんに、鉄壁の守りをもって守ってくれた、歌の上手な、優しいお母さんという「居場所的な存在」がいなかったら、後年、美空ひばりさんと並び称されることになる国民的大歌手、「人生いろいろ」の島倉千代子さんは生まれてなかったんだよな。

やっぱり、「居場所的な存在」としてのお母さんって、すごいよなあ。

人生の、とあるひと時の出逢いをきっかけにして、有島武郎さんにおけるクロポトキンさん自身、そして彼の隠棲する家のような、とてつもない「居場所的な存在」を得られたら、これはとても幸せなことだよね。

そんな稀有な例はさておいて、卑近な例も見てみよう。

かつてなら、夕涼みの縁台や縁側なんていうのは、浴衣がけのお姉さんたちや、将棋とか碁を指すステテコ姿のおっさん連とか、世間話に打ち興じる八っつあん、熊公、ご隠居さんの、夏のいっときの心地よい居場所だったよ。

路地裏なんてのは、鬼ごっこ、缶けり、ベーゴマやメンコに熱中する子どもたちの放課後の格好の居場所だったなあ。この路地裏は、御隠居さんと悪ガキ連中との異世代間交流をさりげなく促進するような得難い場でもあったよね。

かつては、歌とか、おしゃべりとか、議論とか、紅茶とかが大好きな人たちの、仕事帰り、また放課後のひとときの格好の居場所として、「歌声喫茶」なんていうのもあったね。

新宿の「どん底」では、縦７センチ、横１１センチ、厚さ３ミリの歌集を作って配布していたよ。

その歌集には、「原爆を許すまじ」とか「しあわせの歌」とか「我等の仲間」とか「若者よ」とか、日本の民謡、童謡、歌謡曲とかロシア民謡、その他が満載されてて、みんなで声を張り上げて歌ってたよ。

そんな歌声喫茶は、明るい未来の社会を希求する労働者たちや学生たちの気軽な溜まり場的な居場所って感じだったね。

そこでは、カラオケ喫茶とは違って、時に知らない同士の間に、ある種の連帯感が生じたりすることもあったなあ。

近い過去まで日本の民俗社会には、年齢階梯制集団と

して、若者組とか娘組とかがあり、その集団には寝宿っていう独自の居場所があって、その共同体内の若者たちの成長に資していたね。

相互交流の場、情報交換の場としても、とても貴重な居場所だったよな。

こういう地域における若者たちのさりげなくも大切な居場所が消滅してしまったことは惜しまれるね。今の青年団とは、ちょっと違うんだよな。

地域の光景がなんとなくのっぺらぼうで殺風景になってしまったことと、こういう集団が消えうせてしまったこととの間には、明らかな相関関係が見出せるね。

こうした若者組とか娘組といった集団を復活させることは難しいかもしれないけど、それが出来れば、地域の人間関係が甦ること請け合いだよ。

老人会と、より若い世代の集団との間に年齢的な連続性が出来るし、異世代間交流も活発化するよ。

そうすれば、地域の高齢者の「居場所のようなもの」としての老人会なんかも華やぐし、生彩を帯びて活気が溢れるようになるんじゃないかなあ。

死者の「居場所のようなもの」としては、親しい人たちの記憶の中、とか・・・、骨壷、とか、仏壇、とか、お墓、とか・・・があるね。

お墓の中なんかに私は居ません・・・千の風に、千の風に・・・っていうのもあるけどね。

海・・・これは、人間にとっては、母の胎内から連なっている永遠の「居場所的な存在」だしなあ。

日常的な居場所、
非日常的な居場所、
年齢とともに変移する居場所、
義務としての居場所、
生活上の居場所、
職業上の居場所、
長時間の居場所、
いっときの居場所、
気分転換のための居場所、
趣味の居場所、
一人だけの居場所、
少人数の居場所、
多人数の居場所、
月並みな居場所、
思いがけない居場所、
意外な居場所、
心に残る永遠の居場所、・・・。

人生の直前、人生の時どき、そして死後、人には、それぞれ、いろんな居場所そして「居場所的な存在」、「居場所のようなもの」があるんだね。

いろいろな居場所を見出すことは、人生の妙味だし醍醐味だね。

ひとりもいいけど、いろんな人たちと、いろんなかたちで出会える居場所は、とても大切だし、そこで自らにとって意味深い「居場所的な存在」「居場所のようなもの」との出会いがあることも多いからね。

前掲「居場所論：「その諸相」篇～居場所をなくすということなど～」で触れた太宰治の短編佳作「きりぎりす」(『太宰治集』第４巻、１９６４年、筑摩書房）の主人公の女のように、自らの生涯の連れ合い＝「居場所的な存在」と感じた、「清貧に甘んじる反俗的な芸術至上主義者」の画家との貧相なアパート＝日常的な居場所での幸せな生活が、後日、脆くも崩れ去っていった、なんてこともあるけどね。

結婚して暫くの幸せな日々の後、女は、徐々にその画家は、とんでもない反俗的俗物で恩知らずの拝金主義者だったことを知り、こんな男は全く自分の「居場所的な存在」などではありえず、新宿の安アパートから移った三鷹の豪邸も自分にとっては心地よい居場所ではありえないことを悟って、男のもとを去っていったんだ。

大切な居場所、「居場所的な存在」、「居場所のようなもの」を見つけ出すことは、殊の他、難しいことなのかもしれないな。

＊引用・参考文献は、すべて文中に記載。

以下、次稿。

次稿では、さらに文人墨客や運動選手、映画俳優、その他の人びとの居場所、「居場所的な存在」、「居場所のようなもの」を探っていきたい。

次々稿以降では、現代人、わけても昨今の若者たちにとっての「居場所のようなもの」であるスマートフォンに関する考察を展開する予定である。

さらには、、日本的文化空間のなかで長らく剋目すべき「居場所のようなもの」としての機能を果たしてきた炬燵（こたつ）や、日本家屋のウチとソトとの中間に位置し、人間関係の醸成に重要な役割を果たしてきた居場所＝縁側や濡れ縁、縁台等々についても歴史人類学的な視座から捉えてみようと考えている。